

ある患者が治療中に腱鞘炎で困っている友人がいてと言っていた。50代女性でマウスをよく使う仕事なのでたいへんなのだと。

筋肉は腱となり関節をまたがって骨に付着し、関節を動かす。腱はストローの様な鞘を通してスムーズに動く様になっている。その鞘が腱鞘であるが、それが腫れて膨らみ、腱が動く痛み様になるのが腱鞘炎である。

しばらくして、本人が来院した。2ヶ月前に先ずタブレットを使う左前腕手首前後が痛み出し、10日程前からはマウスを使う右前腕手首前後の方が強く痛み出したと言う。問診票を右手で書く時も痛いと言う。腱鞘炎と言えるかどうかは分からないが、いずれにしろ、筋肉に関係するスジが痛んでいる。

腹診すると、胸下部に邪熱を感じるがこもっていて表面には浮いて来ない。お腹はガスで脹満している。胸の熱とお腹の寒で均衡している。慢性的な胸の熱のため、お腹は冷えている必要がある。お腹の冷えのため、胃腸の働きは落ちてガスが発生し、お腹が張っている。お腹の冷えのため、冷え症である。下肢は厚い靴下・レッグウォーマーで保温されていた。

胸下部の邪熱部分に血毒があり、それが両手首周辺に巡ってスジに痛みを出していると思われた。病の根幹は胸下部であり、手首周辺は枝葉末節である。手首周辺の治療とともに胸下部を中心とした全身治療をする必要がある。

手首周辺局所に対して、最初お通常の鍼で施術したが、なかなか痛みが取れないので、刺絡(少し血を出す)をすることにした。するとやや黒い血が出て、痛みは明確に取れてきた。

胸下部の邪熱も全身治療により浮いてきたので、刺絡が可能になった。その裏側である背側から刺絡をするようにした。黒い血が出てくる。

週1回の治療の時に毎回場所が変わる両前腕の痛む箇所4ヶ所前後を刺絡した。背は2・3ヶ所を刺絡した。9回目ぐらいでやっと手首周辺に痛むところがないという状態になった。

ただその頃に首から肩にかけてのスジが「ピキッとなった」と訴えることが2回あった。そこを刺絡すると、やはりやや黒い血が出た。胸下部の血毒がここにも来たわけである。

江戸時代後期の鍼医・芦原英俊の『鍼道発秘』に「青筋(俗に早打肩と云う)」というのが出ていて、「俄(にわか)に悪血攻め上りて、一時の内に死するなり」とある。横田観風師の解説によれば、体内奥深くの血毒が肩周辺に出てくるもので、現代的には、血毒が脳に行けば脳卒中、心臓に行けば狭心症となる。『鍼道発秘』には、関連部位から「血を漏らすべし」とある。急性的には脳卒中、狭心症という事になるが、血毒が脳を巡れば、様々な障害が出てくるだろう。

患者の場合も血毒の急な大きな「攻め上り」があったわけではないが、ごく小さな早打肩と見ることができる。手首周辺の痛みがなくなったからといって、根本的な問題はなくなっていない。

治療を続け、その後、手首周辺の痛みも肩の症状も出なくなった。腱鞘炎であったとしても、慢性関節リウマチであったとしても、症状が出る局所は病の枝葉末節であって、根幹は多くの場合、胸下部の血毒であり、他のからだの状態が違うために症状が異なり、病名が異なっているに過ぎない。しかし西洋医学はそうは観られない。症状軽減や検査値正常化の対症療法に終始し、医原病を作り出す。しかもそれを「医原病」と認識することなく、新たな病として取り組もうとするのである。(2016年6月28日)